

玉野の古墳 — 出土品は何を語る —

玉野市教育委員会・玉野市文化財保護委員会

はじめに

玉野市内出土の考古資料は、平成 2 年（1990）3 月オープンの旧総合文化センター郷土資料展示室に長く展示していましたが、一昨年 4 月の図書館のメルカ移転に伴い閉鎖され、市民の皆さんの目にとまることはありませんでした。

今年度、玉野市内の古代遺跡のうち、特に古墳とその出土資料を選んでご紹介することにしました。造山・作山古墳のような巨大古墳が出現した吉備中樞部と違って、当時離島であった児島地方、特に玉野市内では、目を見張る古墳は現われていません。しかし、全国や吉備の歴史の流れに沿うように、市内の古墳も姿を変化させていきます。その様子をじっくりご覧いただき、出土品が語る 1,500 年前の玉野を想像してみてください。

古墳時代前期（3 世紀後半～4 世紀）

【この時期の概要】 古墳時代は、前方後円墳をはじめ、円墳・方墳などの形態を持つ「古墳」という墳墓が出現した時期です。女王卑弥呼が君臨した邪馬台国が存在した時期が、弥生時代から古墳時代へ進む境目の時期に当たります。その最古期の古墳の一つは、卑弥呼の墓とも考えられている奈良県桜井市の箸墓古墳です。

吉備地方では、岡山市東区の浦間茶臼山古墳が箸墓の 1 / 2 の設計図で造営されたといわれています。また、岡山市北区吉備津の中山茶臼山古墳、岡山市中区の備前車塚古墳が大規模な前期古墳とされています。この時期、吉備の首長たちは、吉備の独自性を消して大和との連携を図るように古墳造営を開始します。埋葬施設は竪穴式石室を用い、墳丘上に円筒埴輪を廻らす場合が多いようです。

玉野市内では、弥生から続く石島・戸尻鼻の組立式石棺墓がこの時期のものです。また、昭和 27～37 年（1952～1962）の植林作業中に現在の玉野スポーツセンター付近で発見された深山遺跡（昭和 42 年国道 30 号線バイパス工事で消滅）は弥生後期に成立し、古墳前期が中心と考えられています。



深山遺跡発掘風景（『玉野市史より』）

古墳時代中期（紀元 5 世紀）

【この時期の概要】 古墳中期には、畿内に大山古墳（仁徳陵、全長 525m）・磐田御廟山

古墳（^{おうじん}応神陵、425m）・ミサンザイ古墳（^{りちゅう}履中陵、365m）などの巨大古墳が出現します。

吉備地方でも、^{そうざん}造山（350m）・^{さくざん}作山（282m）古墳のように、中央に匹敵する巨大古墳が造られ、大和と同等あるいはそれ以上の権威と権力を誇示するようになります。しかし、5世紀後半には、赤磐市の^{りょうぐうざん}両宮山古墳（206m）や総社市の^{しゅくてらやま}宿寺山古墳（116m）などのように規模も縮小化し、畿内勢力が吉備地方を抑え込むようになったといわれています。『日本書紀』に見られる吉備^{しもつみちのおみ}下道臣前津屋や吉備^{かみつみちのおみ}上道臣田狭の乱（^{ゆうりやく}雄略天皇7年紀）、^{ほしかわのみこ}星川王子の乱（雄略23年紀＝479年か）の伝承は、これらを反映していると考えられます。

この時期、玉野市内では、滝の先祖山古墳群、鐘鋳場古墳群、長尾の^{かんすやま}鴻巣山古墳などが5世紀の古墳といわれています。いずれも^{はこしきせつかん}竪穴式石室もしくは^{はこしきせつかん}箱式石棺墓と呼ばれる埋葬施設を持ち、^{たかべ}荘内の最奥部で出現しています。中期末になると、高辺古墳・長崎鼻古墳、波知の小丸山古墳・^{おそごえ}ハツリ山古墳（いずれも消滅）が造営されます。中でも宇野・中山の先端部で発見された^{おそごえ}瀬越古墳（消滅）は、次の^{よこあなしき}横穴式石室を持つ後期古墳への橋渡しを示す古墳とされています。

滝・^{かねいば}鐘鋳場古墳群（消滅）

この古墳群は、滝の先祖山古墳群から南方で三堀池の西方に位置する尾根上にあったものです。『玉野市史』では、最も高い位置にある古墳は^{はこしきせつかん}竪穴式石室で、全長2.8m・幅60～45cm、小さい土盛りがなされ、もう1基も小さい土盛りがあるが、内部は不明で、もう1基は箱式石棺であるとしています。この古墳群には3基の古墳があったことになります。

昭和63年（1988）夏、この丘陵の土砂採取工事が計画され、埋蔵文化財の発掘調査が同年10月11日～15日のうちの4日間実施されました。調査は「滝古墳群緊急発掘調査委員会」が実施し、直接担当したのは岡山県古代吉備文化財センターで、平成元年3月「岡山県玉野市滝・鐘鋳場1号墳」の発掘調査報告書が発行されました。

この時発掘されたのは、報告書に石室の規模を「内法で長さ約270cm（推定）、幅約60cm、深さ約30cm（推定）」とあるので、『玉野市史』で3基のうち最初に記述する古墳とみられます。標高約55mの尾根の先端付近に築かれたこの古墳は、約8×10mの方墳とみられ、西南部にわずかな土盛りが確認されています。埋葬施設は、長さ約340cm、幅約120cm、深さ約40cmの土壌を掘って、その内部に小形の^{はこしきせつかん}竪穴式石室が作られ、4～5世紀のものとしてされています。内部から遺物は全く出土しませんでした。かつて人骨が出土したという伝承もあります。



発掘最終日の鐘鋳場古墳

被葬者は、眼下に望む荘内の平野を基盤に生活していた「氏族の族長」と考えられます。

^{おそごえ}瀬越古墳（消滅・移築復元）

宇野三丁目の中山隧道（1974.3竣工）を浄化センター側に出たあたりを瀬越といいます。その道路工事中に発見されました。

この古墳は箱式石棺を持つ古墳時代中期末（今から約1500年前）の円墳です。石棺は平たい石をお棺の形に並べ、棺の内側を粘土で平らにし、死者を埋葬した後、蓋をして、外側

に礫をつめ、さらに全面を粘土で覆っていました。昭和48年（1973）1月までに粘土の中から鉄製直剣が発見されたほかは、副葬品は盗掘されていました。また、粘土は師楽式土器による製塩作業の時に使用された炉のものと同じ粘土質であることがわかっています。そのため、この古墳の被葬者は、製塩集団または漁業集団の族長であろうと考えられます。

この古墳が築造された古墳時代中期末頃は、九州の一部に横穴式石室を備えた新しい後期古墳が出現する時期です。この瀬越古墳は、玉野市で竖穴式石室や箱式石棺を持つ前・中期古墳から、横穴式石室を持つ後期古墳へ移行する過程の墳墓として貴重なものです。



なお、石棺は旧玉野市総合文化センターの玉野市民憲章碑のそばに移築復元されています（移築復元写真 全長 1930 cm×幅 38 cm×深さ 26 cm）。

滝・先祖山古墳群

この古墳群は、滝の三堀池を見下ろす丘陵上にあるものです。昭和35年（1960）頃の調査では、いずれも箱式石棺墓で、1号墳は調査の数年前に砂防工事で発見され、ガラスの小玉2個が見つかり、杉野文一氏が保管しているとあります。2号墳は盗掘の跡があり、3号墳は蓋石が一部露呈しているが盗掘は不明とあり、昭和36年1月に調査を行うように記録されています。

『玉野市史』では、長さ3.5m前後の竖穴式石室を持つ古墳があり、周辺に2基の箱式石棺墓があると述べています。このうちの3号墳は、堀の内古墳という名で昭和63年（1988）6月におこなった調査を宇垣匡雅氏が報告しています。それによると、「御所」という屋号を持つ依田氏の背後の山の中腹にあり、経15m高さ2m、埴輪は未確認、蓋石が露呈した竖穴式石槨があり、長さ4mで鉄剣の破片が出土したとされています。この古墳群の出土資料とされるものは下に展示する鉄剣ですが、上記の記録から推定すると3号墳（堀の内古墳）出土の可能性が高いと思われます。



高辺1・2号墳（消滅）

この古墳は、築港五丁目の玉野競輪場の南側丘陵にあった五世紀末ころの中期古墳です。昭和35年（1960）頃の調査では2基あったとされ、競輪場のクレー射撃場建設の際に、若干の古墳が破壊されたと記録されています。1号墳は箱式石棺墓で破壊され、2号墳は昭和29年（1954）頃の調査では、蓋石もなく盗掘を受けていましたが、横穴式石室を持つ円墳で、幸い須恵器数個・土師器2個・鉄器若干を収集し、杉野文一氏が保管しているとあります。

一方、昭和45年（1970）刊の『玉野市史』には、竖穴式石室を持つ古墳が2基あり、埴輪などの形象埴輪も出土し、他に数基の箱式石棺も存在していたとされています。

展示コーナーには、高辺古墳出土の埴輪片・須恵器・土師器・鉄器を展示しています。上記2種類の記録を裏付け、杉野氏から寄贈されたもののようです。

古墳時代後期（紀元6～7世紀前半）

【この時期の概要】 5世紀後半に九州中北部に広まっていた横穴式石室は、6世紀には畿内でも盛んに造られるようになりました。大阪府高槻市の今城塚古墳（継体陵、190m）や奈良県橿原市の見瀬丸山古墳（欽明陵、318m）などがこの時期の大古墳です。6世紀末かには前方後円墳が消え、方墳や円墳・八角墳が中心となります。巨大石室を持つ古墳も現われ、蘇我馬子（626没）の墓とされる奈良県明日香村の石舞台古墳（石室長19.1m）は有名です。これとは別に、西日本で小形の円墳が集中する群集墳が盛んに造られます。これは、大小首長のもとで台頭してきた有力家父長層の墳墓とされています。首長層の権力の象徴であった古墳が、家族墓としての性格を持つようになりました。

吉備ではこの時期100mを超える大古墳は現われなくなりますが、6世紀後半からは巨大石室を持つ古墳が出現します。箭田大塚（石室19.1m）・こうもり塚（同19.4m）・牟佐大塚（同18m）は三大巨石古墳といわれ、石舞台古墳に匹敵するものです。一方、吉備全域に群集墳が爆発的に出現します。総社市清音の三因千塚古墳群は、丘陵の斜面や尾根上に合計約200基の小古墳が造られています。

玉野市内では、この時期の古墳として代表的なものが田井の孫座古墳で、6世紀末の横穴式石室を持つ円墳です。このほか、玉～和田の丘陵上にあった地蔵山1・2号墳（消滅）、槌ヶ原の南奥古墳、築港の大砂場1・2号墳、田井の先丁場古墳、出崎半島の灰出1・2号墳（消滅）、さらに胸上の塚本古墳、番田の大入古墳、上山坂の塚谷古墳、石島の1・2・3号墳などが造られています。

6世紀半ばの欽明朝には、大王勢力が吉備内部の北辺と南辺に拠点を設定しました。556年の白猪屯倉（真庭市付近）と翌年設置の児島屯倉（児島半島）がそれぞれです。玉野市内のこの時期の古墳は、この児島屯倉が支配する有力家父長層の墓で、須恵器などとともに製塩土器なども副葬され、農耕や製塩集団の長であったと考えられます。

田井・孫座古墳 1961年3月27日 玉野市重要文化財（史跡）指定

この古墳は、田井二丁目の清水川南側の山林中にある標高約25mの尾根山頂部にあり、6世紀末頃の横穴式石室をもつ後期古墳です。墳丘の経は約13m、玄室は長さ3.3m・幅1.6m・高さ1.8m、羨道部は長さ2.7m・幅1.1mという規模です。

昭和60年（1985）7月、田井の人が孫座古墳出土と伝えられる遺物を市に寄贈されました。明治末年に同古墳から発掘された品を先祖が保管していたといわれ、総数15点あります。内訳は、「須恵器1・蓋付き壺1・提瓶3・蓋付き坏2・蓋なし坏5・罎1・製塩土器1・鉄器（馬具）1」の計15点と記録されており、現在確認できる14点を展示しています。製塩土器があることから、被葬者が製塩集団の族長であったと思われる。

孫座古墳の墳丘及び石室はほぼ完全に保存されており、かつては石室内にも自由に入ることができましたが、石室の保護のため鉄柵を設け、施錠しています。

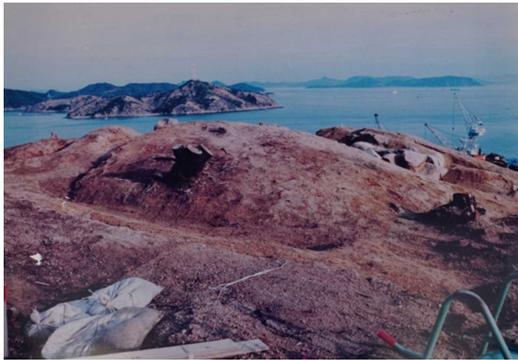


しそうやま

地蔵山1号墳（消滅）

この古墳は、玉三丁目の三井造船深井門背後の地蔵山から鮎崎鼻へ東方向に延びる尾根の先端頂上部に築造された古墳時代後期の古墳です。同社の林地開発事業によって削平消滅するため、平成元年11月27日から翌年3月10日まで発掘調査が行われました。この発掘の調査報告書は『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告書（5）地蔵山1号墳』として、平成4年3月31日に発行されています。

この報告書によると、古墳の位置するのは標高76.6mの尾根上で、経12m×11.5m、残っている高さ90cmの墳丘を持つ円墳です。また墳丘の北から西北西にかけて長さ約6m、幅約2mの周溝が残っていました。残存部以外はすでに崩壊してしまったと推定されています。内部構造は横穴式石室で、玄室の長さ3.7m、奥壁幅1.6m・高さ1.3m、羨道の残存部は2mあり、天井石は盗掘時に除去されたと思われます。出土遺物は、須恵器・土師器・製塩土器・鉄器・耳環等があり、須恵器の坏蓋の編年比較によって6世紀後半前期、同後半後期、7世紀前半前期のものと見られ、少なくとも3回の追加埋葬が行われたと考えられています。また、製塩土器が検出されたことから、この古墳の被葬者が古墳時代後期の製塩集団の墳墓と推測されています。鉄器は、鉄鏃1個と鉄釘3点、耳環は銅製品の金環となっています。



地蔵山2号墳（消滅）

この古墳は、地蔵山から三井造船造機門工場の背後に延びる尾根に築造されていたもので、昭和35年（1960）頃の調査では、「砂防工事中一部破壊され、玄室が半分位残されている。玉三井造船所構内裏山にあって、後期古墳に属するものと思われる。幅1米50、深さ2米。発見される迄蓋石も無く、僅かに扉石上部が露出していた」と報告されており、須恵器約10個・坏・高坏・壺、師楽式土器1個・刀子1本が三井造船所に所蔵されているとあります。これらの考古資料は平成2年（1990）5月、地蔵山1号墳の調査の参考に三井造船所から玉野市に寄贈されました。



出崎・^{はいで}灰出1・2号墳（消滅）

この古墳は、出崎半島の先端部、沼・灰出^あにあり、中国電力株式会社岡山電力所の高圧送電線鉄塔およびケーブルハウス新設に伴う埋蔵文化財発掘調査が行われました。調査は平成4年3月16日から6月10日まで行われ、標高約14mほどの尾根上に2基が隣接して発見され、北側のものを1号墳、南側を2号墳としました。坏による年代想定では、1号墳は6世紀後半終り頃、2号墳は6世紀後半初め頃の後期古墳であると考えられます。同5年7月に発掘調査概要報告書が提出され、正式な報告書は『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告（6）』として平成11年10月20日に発行されています。



左が1号墳、右奥が2号墳

1号墳

墳丘の規模は約11m×約12mの円墳で、残っている高さは約70cmでした。周溝は検出されませんでした。内部構造は横穴式石室で、全長約3m・奥壁部分の幅約1.7m・高さ約90cm、羨道部の全長約1.7m・幅65cmでした。天井石は盗掘を受けた時点で撤去されたと思われます。石室内部からの出土遺物は、須恵器・土師器・製塩土器・装身具・滑石製紡錘車などがあります。



2号墳

墳丘の規模は、調査区域外になっている部分があり、区域内では約15m×約13mの円墳で、残っている高さは約90cmありました。周溝は検出されませんでした。2号墳も横穴式石室で、羨道部^{せんどう}などの開口部は調査区域外で全長は判明しませんでした。西側側壁部分で約2.5m・奥壁部分の幅約1.5m・高さ約1.5mでした。天井石^{てんじょういし}が除去されていて、こちらも盗掘を受けたものと思われます。石室内部からの出土遺物は、須恵器・土師器などがあります。また、石室外からは、人物埴輪^{はにわ}1点と円筒埴輪が見つかっています。



考古資料解説

須恵器 (すえき)

5世紀になって大陸から朝鮮半島経由(百済)で伝わった新技術で、ロクロを使って作り、穴窯(あながま)と呼ばれる地下式・半地下式の登り窯で、1,100度以上の還元焰焼成が行われるため、青灰色をした硬質の土器となりました。主に古墳内部に収められ、祭祀や副葬品に用いられました。戦前までは祝部(いわいべ)式土器と呼ばれていました。

蓋付坏 (ふたつきつき)

食物などを盛るための個人用食器です。割れて蓋のないものもあります。



埴 (かん)

首が短い小形の壺で、蓋付もあります。



長頸壺 (ながくびつぼ)

壺のうち、頸の長いものをいいます。単なる貯蔵用でなく液体を注ぐ器や祭器と考えられています。



甗 (はそう)

口が広くて、胴部に小さい孔のある小形の壺。孔に竹管を差し込み、中の液体を注ぐのに用いたと考えられています。



平瓶 (ひらべ)

液体を注ぐために、楕円球形をした胴部の一方のやや偏った位置に、長い口を設けた須恵器です。



提瓶 (さげべ)

扁球形のものに頸部をつけたもの。肩部に環状または鉤状の取手があります。液体などを入れ、紐で肩などから吊下げて用いました。



土師器 (はじき)

弥生土器の流れを汲む素焼きの土器で、古墳時代には土師器と呼ばれるようになりました。古墳中期には大陸から伝わった須恵器と並行して作られ、須恵器の形を模倣した場合があります。小さな焼成坑を地面に掘って野焼きされるので、酸素が供給される酸化焰焼成となります。焼成温度は須恵器と比べ800~900度と低く、橙色ないし赤褐色を呈し、須恵器に比べて軟質となります。奈良・平安時代まで生産されました。

埴輪 (はにわ)

古墳の周囲や墳丘上に並べた土師器系統の土器で、3世紀後半から6世紀後半にかけて造られ、中心的な埴輪には、表面にベンガラなどの赤色顔料が塗られているようです。前方後円墳が作られなくなって埴輪も消滅していきます。大別すると、筒形をした円筒埴輪と生物や物を形どった形象埴輪に分けられ、後者は人物埴輪、動物埴輪、器財埴輪、家形埴輪等に分類されます。



円筒埴輪

高坏（たかつき）
高い台のついた坏形の盛り付け用の食器で、蓋用のつきもあります。

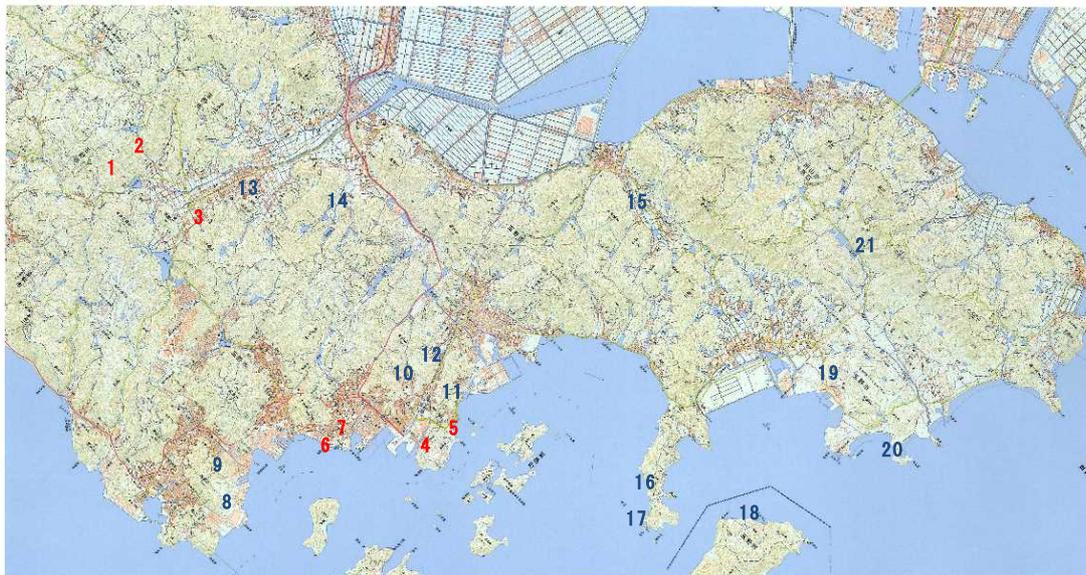
製塩土器
物を貯蔵したり煮たりする壺の一種で、塩作り用のものを製塩土器といいます。古墳内部に副葬されていれば、被葬者が製塩集団の族長であったと推定されます。



人物埴輪



玉野市内のおもな古墳所在地



番号	所在地	古墳名	時期	11	田井 1 丁目	先丁場古墳	後期
1	滝	鐘鑄場古墳群	中期	12	田井 2 丁目	孫座古墳	後期
2	滝	先祖山古墳群	中期	13	迫間	丸山古墳	後期
3	長尾	鴻巣山古墳	中期	14	槌ヶ原	南奥古墳群	後期
4	築港 5 丁目	高辺古墳	中期	15	波知	小丸山古墳	後期
5	築港 5 丁目	長崎鼻古墳	中期	16	沼	出崎古墳	後期
6	宇野 3 丁目	瀬越古墳	中期	17	沼	灰出 1・2号墳	後期
7	宇野 3 丁目	中山古墳	中期	18	石島	石島 1・2・3号墳	後期
8	玉 3 丁目	地藏山 1号墳	後期	19	胸上	塚本古墳	後期
9	玉 3 丁目	地藏山 2号墳	後期	20	番田	大入古墳	後期
10	築港 3 丁目	大砂場古墳	後期	21	上山坂	塚谷古墳	後期

